

# うま獣医のよもやま話 ⑤ 宮越大輔獣医師

## 黄体ホルモンは必要なの??

宮越大輔 北海道恵庭市出身  
平成18年3月 鹿児島大学農学部獣医学科卒業  
同年4月 日高軽種馬農業協同組合入社  
荻伏診療所勤務  
平成20年3月 静内診療所勤務 現在に至る

今回は、妊娠鑑定で受胎したとき注射している黄体ホルモンのことについて書かせていただきます。

もう繁殖関係の話はたくさんだよとわずに少しお付き合いください。

黄体ホルモンは、せっかく受胎したのに、「おちたり」、「消えたり」しないよう注射されている薬です。たとえば、オバプロンデポやルテオーゲンLなどの薬品のことを指します【写真1参照】。きっと皆さんも種付け



写真1

から17日目の妊娠鑑定の時、さらに5週の再妊娠鑑定の時に黄体ホルモンの注射を打ってもらっているとします。

皆さんのうち、どれだけの方が妊娠鑑定で受胎したときに黄体ホルモンを注射しているのでしょうか…?

また、黄体ホルモンを注射することが本当に効果的なのでしょうか?

日高の繁殖に関する調査によると、種付けから17日目の鑑定で受胎した馬のうち約3分の2の馬に黄体ホルモン注射が行われているようです。

この数字を見ると、黄体ホルモンが非常に多く使用されているのがお分かりいただけると思います。確かに、黄体ホルモンの注射を打ちはじめると打たなかったら消えてしまうのではないかと不安になったり、消えてしまった場合には打っておけばよかったと後悔してしまうかもしれません。

上記の調査では黄体ホルモンの注射で胎子が消えてしまうのを防ぐことができているのかについても調査しています。黄体ホルモンを種付けから17日目の妊娠鑑定の時に注射したグループと注射していないグループで種付けから5週までの胎子が消えてしまう確率を比較しています。(なお、この調査群の中に、毎日、経口で黄体ホルモンを与えた馬は入っていません。)

結果、黄体ホルモンを注射したグループの方が胎子が消えてしまう確率が高い値となりました。もちろん、過去に消えたことがある馬や消えそうな馬ほど黄体ホルモンを注射されやすいのでこの結果からすぐさま黄体ホルモンを注射したほうが消えやすいとはなりません。

しかし、少なくとも17日目に黄体ホルモンを1回注射しただけでは、胎子が消えてしまうのを効果的に防いでいるとは言えないと考えられます。

では、どのように黄体ホルモンを投与すれば効果的なのでしょうか??

この質問に対してははっきりとした方法をお示しすることができませんが、どうしても黄体ホルモンを注射するのであれば、理論的には週に1回、黄体ホルモンを注射する必要があります。

また、より効果的な方法として飲ませ薬の黄体ホルモン【写真2】を毎日与えることが有効だとする報告



写真2

もあります。個人的には注射よりも飲ませ薬のほうをお勧めしています。

結論として、皆さんに知っていただきたいのは17日目の鑑定の際に習慣的に注射している黄体ホルモンは実はあまり効果的ではない可能性があるということです。

ただ、習慣的に注射しているだけ、もしくは、おまじないのつもりで注射しているだけならば黄体ホルモンの注射は行わなくてもよいかもしれません。

また、消えてしまうリスクの高い場合には17日目の1回の黄体ホルモン注射だけでは効果的な予防法とはいえません。そのような馬の場合、掛かり付けの獣医さんに相談して、飲ませ薬の黄体ホルモンを飲ませ続ける方(種付けから120日目まで飲ませる)が良いかもしれません。

それでは以上で今回のよもやま話は終了です。最後まで読んでいただき有難うございました。